國學院大學学術情報リポジトリ

〔書評〕牧野格子著『謝冰心とアメリカ』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮本, めぐみ, Miyamoto, Megumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000703

〔書評〕

牧野格子著『謝冰心とアメリカ』

宮本めぐみ

本書は、その冒頭でも記されているとおり、中国現代文学を代表する女性作家謝冰心（一九〇〇～一九九九年）の「アメリカ留学時代を中心とするアメリカとの関わりについての研究」である。

謝冰心は一九一九年の文壇デビューから一九九七年に至るまで文章を書き続けた非常に息の長い作家で、小説、詩、散文、児童文学など様々なジャンルで優れた作品を残している。中国が社会主義国家へと向かう過程においては、キリスト教の影響が指摘されるその博愛主義的な作風を批判されることもあったが、文革の苦難をも乗り越えて作品を書き続け、晩年には「中国文壇の祖母」と称された。中国では小中学校の教科書にその作品が採用されることもあり、誰もが知る国民的作家である。福建省福州市に冰心文学館があり、定期的に館主催の国際学会が開催され、論文集が刊行されている。

日本においても謝冰心作品は戦前から翻訳・紹介されており、夫呉文藻の仕事の関係で一九四六～一九五一年にかけて五年弱滞在するなど、日本とは縁のある作家と言える。来日中には研究者、作家など数多くの日本人と交流し、東京大学などで講義や講演をおこない、作品を執筆して新聞雑誌等に寄稿したため、日本に残されている関連資料も比較的多い。近年の研究としては萩野脩二『謝冰心の研究』（朋友書店、二〇〇九年）、虞萍『冰心研究』（汲古書院、二〇一〇年）がある。また、二〇一七年には九州大学図書館で謝冰心の詩集『春水』の手稿が発見されて話題となり、国際シンポジウム「『春水』手稿と日中の文学交流――周作人、謝冰心、濱一衛」が開催され、同名の論文集（花書院、二〇一九年）も出版された。本書はそれらに続く謝冰心研究の成果である。

本書の特徴は、中国でも日本でもなく、謝冰心と「アメリカ」に焦点が当てられている点にある。謝冰心のアメリカ留学期間は一九二三～一九二六年のわずか三年間に過ぎないが、若く多感な時期に経験した異国での日々は、のちの執筆活動のみならず、謝冰心の人生そのものに大きな影響を与えたと考えられる。

本書終章に「本論は、今まで中国（大陸）でも、日本でも本格的になされてこなかった謝冰心のアメリカ留学時期を中心とした研究を最初に行ったもの」（二六六頁）とあるように、著者の牧野氏は「謝冰心とアメリカ」研究のパイオニアである。牧野氏は大学院生であった一九九七年から謝冰心のアメリカ留学時期を研究対象に定め、自身もまたアメリカに留学して現地の大学図書館等に赴き、様々な資料を発掘・収集し、論文を執筆してこられた。本書は二十年以上にわたる牧野氏の研究をまとめたもので、前半は大学院生時代に執筆したもの（博士論文の一部に加筆修正したものを含む）、後半は近年の研究となっている。

以下に目次を示す。

序論　新たな謝冰心像のために
第Ⅰ部　新たな謝冰心研究のための考察
　第1章　アメリカ留学とその背景
　第2章　謝冰心評価の変遷
第Ⅱ部　留学生としての謝冰心
　第1章　出発前の状況
　第2章　一九二三年中国人アメリカ留学生
　第3章　留学生としての謝冰心
　第4章　謝冰心とエレン・ラモット『ペキン・ダスト』
第Ⅲ部　中国近代女性としての謝冰心
　第1章　ウェルズリー大学の中国人留学生と日本人留学生
　第2章　瀬尾すみ江から見た謝冰心
　第3章　謝冰心から見た瀬尾すみ江
第Ⅳ部　謝冰心とボイントン
　第1章　グレース・ボイントンについて
　第2章　ハーバード大学ホートン図書館所蔵 ボイントン文書ならびに謝冰心直筆の書簡について
　第3章　ハーバード大学ラドクリフ研究所シュレジンジャー図書館所蔵 ボイントン日記
　第4章　英訳本『春水』における翻訳手法と新解釈への可能性
終章　新たな謝冰心像とは

まず第Ⅰ部では、謝冰心のアメリカ留学が、当時在学していた燕京大学の英語教師グレース・ボイントンによってもたらされたこと、ボイントンが自らの母校であるウェズリー大学への留学を謝冰心に勧め、その留学が奨学金の給付される好条件の留学であったことなどが紹介されている。

つづく第Ⅱ部では、一九二三年当時上海で発行されていた新聞『申報』『時報』の記事から、謝冰心を含む中国人留学生たちの渡米前の状況や歓送会の様子、留学生たちの出身校やその専攻、アメリカ留学派遣事業の歴史などのデータが示され、謝冰心のアメリカ生活の経過及びその比較対象として同時期にアメリカに留学していた呉文藻、聞一多、梁実秋の活動などが記されている。謝冰心研究のみならず、一九二〇年代の中国人アメリカ留学生の研究として読むこともできる内容となっている。

第Ⅲ部では、ウェルズリー大学のアーカイブから発見された写真を基に、謝冰心と同時期に同大学に留学していた中国人留学生と日本人留学生に関する調査結果が示される。謝冰心と共に写真に写っている留学生たちの氏名や経歴が紹介されており、一九二〇年代にアメリカ留学を経験した女性たちが、帰国後どのような人生を送ったかが明らかにされている。また、日本人留学生たちが関東大震災からの復興支援のためにおこなったチャリティー劇に謝冰心が参加した時の写真も掲載されており、日本人留学生に混ざって劇用の衣装をまとっている謝冰心の姿から、日中の留学生たちの交流が見て取ることができる。さらに、謝冰心と親しく交流した日本人留学生瀬尾すみ江についても詳述されており、瀬尾の著作における謝冰心や中国文化に関する記述から、二人の間に「一種同盟感にも似た共鳴を見て取ることができる」（一五四頁）こと、謝冰心の作品には瀬尾の名は出てこないものの、謝冰心が戦後の訪日時に瀬尾を探す新聞記事を出して再会を果たしたこと、対談の様子から二人が「深い絆でつながっているといえる」（一七二頁）ことが指摘されている。

第Ⅳ部では、グレース・ボイントンの書簡・日記に記されている、謝冰心に関する記述が紹介される。ホートン図書館に所蔵されているボイントンの書簡（一九二〇～一九五一年までのもの）は七百十通以上あり、この中に謝冰心が幾度となく登場するという。ボイントンと謝冰心は家族ぐるみで交流していたため、ボイントンが家族に宛てて書いた書簡には謝冰心がキリスト教の洗礼を受けた時の様子などが記されており、謝冰心がボイントンの両親宛てに書いた直筆の英文書簡も残されているのである。また、シュレジンジャー図書館所蔵のボイントン日記（主に一九三八～一九五一年までのもの）には、日中戦争勃発後に雲南・重慶へ移った謝冰心をボイントンが訪ねた際の記述があり、戦時下の困難な状況下における謝冰心一家の様子を知ることができる。最後に、ボイントン訳『春水』の紹介・分析もなされており、第Ⅳ部全体でボイントンと謝冰心の親交の

深さ、ポイントンから見た謝冰心像が示されている。

以上、本書の概要を述べたが、その内容は多岐にわたっており、すべてを紹介することは困難である。評者の関心を引いた部分に重心を置いており、網羅したものではないことをお断りしておく。

本書は謝冰心という作家についての研究であるが、作品を論じた部分は少なく、謝冰心のアメリカ留学にまつわる様々な背景、関わりのあった人々についての調査や関連資料の提示が主な内容となっている。それゆえ、牧野氏自身が「謝冰心の文学そのものにはまだ迫り切れていない」（二七五頁）と述べているように、文学研究としては物足りない感もある。序章に「あまり注目されてこなかった彼女のアメリカ留学時期及びアメリカとの関わりに光を当て、新たな謝冰心像を探りたい」（三頁）とあるが、終章に至るまでに構築された「新たな謝冰心像」も、まだ明確ではないように感じられる。

だが、本書で示された資料には、これまで日中の謝冰心研究者に知られていなかった、事実上新発見のものが多くある。これらは牧野氏が発掘しなければ今でも我々の目に触れることはなく、眠ったままとなっていたであろう、大変貴重な資料である。所在のわかっている資料を閲覧するのは簡単だが、所在不明の資料を探し出すのは難しく、存在するのか否かもわからぬ資料を手に入れるのはさらに難しい。それゆえ牧野氏の研究は中国の研究者たちにも高く評価されている。今後の研究の進展に期待したい。

（A5判、三二〇頁、晃洋書房、二〇二一年三月発行、定価七〇〇〇円＋税）